山河極史見聞

入塩平八郎の乱と古河藩

大塩に関わる記録

平八郎は、天満(大阪市北区天満朝、大坂町奉行所の元与力、大塩軒、大坂町奉行所の元与力、大塩天保8(1837)年2月19日 世にいう「大塩平八郎の乱」をお こしました。 一丁目)の自邸に火をかけて蜂起、 実は、古河歴史博物館にはこの貴

た日記などは、大塩最期の成り行樫の木棒やその様子を克明に記し 化財として高い評価を受けている 重な関係資料が収蔵されています。 きを生々しく伝える唯一無二の文 殊に大塩の召捕に用いたという

といってよいでしょう。 なぜ蜂起を…

達して米の先物取引や投機取引な も19世紀になると、金融市場が発も29世紀になると、金融市場が発 することになります。 は、乱高下する米価の調整に腐心 どが行われるようになり、幕府

上げますが、庶民には食料費の負高い米価は武士の実収入を引き

ました。 らこちらで目立つようになってい 幕藩体制のさまざまな綻びがあち

促しますが不調に終わり、やがて策の上申や義捐金の拠出を豪商にす。大塩は、町奉行に対する救済 めませんでした。 援を試みるものの事態の好転は望 家財・蔵書を売却して困窮民の救 や餓死者が続出する事態に及びま で天保の飢饉が発生、 米価の高騰

奪した食糧や金品を窮民に分け与町奉行の誅殺と豪商・大店から略で集めて救民の理念を掲げ、大坂 えるという計画を企てます。

がれば武士にも貧困に喘ぐものが担が増すばかり。一方、値段が下 あらわれる始末。

盾に対応できなくなりつつあったこの時代、こうした構造的な矛

折しも数カ年に及ぶ冷害や長雨

そこで、 大塩は、 ひそかに同志

く、その勢力は夕刻までに鎮圧さ 大塩の思惑どおりに進むことな 前の察知により、この武装蜂起は 内通者の密告による事



は幕府を動揺せしめるに十分な大どであったといい、大坂市中の五分の一を焼失させた元役人の反乱分の一を焼失させた元役人の反乱が、江戸市中では大坂落城や町奉ず、江戸市中では大坂落城や町奉 ず、ことも、 事件となりました。 その影響は計り 知

養子格之助の行方が、ようとして かけたといってよいでしょう。 しれなかったことも動揺に拍車を また、 乱直後から大塩平八郎と

▲陳列されている「召捕棒」(国重要文化財、当館蔵)

たずらに日数を経るばかりでいさ の探索が全国に及んだものの、 さかの進展もありませんでした。 さまざまな噂のなか、大塩父子

西特法是在思教中一日 外国人名文郡上将文司

▲谷文二筆「大塩平八郎之像」(当館蔵)

記録に残る大塩の最期

ながら、 泉石日記」によりその間の状況をサメキサッ 以下、冒頭に紹介した「帰帰 垣間見ることにしましょう。 と、事態は急転します ところが、翌3月の末になる 筆写の古河藩家老鷹見泉

らぎんきょう

それとちつるち

有粉

西と家際とあれて大事が

ヤキーでりて

金布を後見る名を書

日とうといういんのまっまることがりのかっただいのとうなったるとうないとうないまったまったのはかかなるころあったそうちゃんできるとうないといいかがかかかかから

屋に奉公する娘からの一報が入り(大阪市西区靱本町一丁目)の太物地を担当する役所)に、靱油制町地を担当する役所)に、靱油制町で ます。 3月26日、 平野郷陣屋(大阪市

在坂中でした。

石は、大坂城代の土井利位に従い

ことがあり、彼らを預かっていて塩へ染物の揃手拭いを納めていた日く、「ここ美吉屋はかつて大 もおかしくない」と。 また、「朝、飯を入れた櫃に茶

▲「鷹見泉石日記」天保8年3月27日条(国重要文化財、当館蔵)

意にしていた町奉行所与力内山彦情報の裏付け、捕方への指示、懇情報の裏付け、捕方への指示、懇談 翌朝になると空となり飯櫃にふた 碗を添えて棚下にそれを置くが たび飯を移している」とも。

次郎への根回しなどがすすめられ

翌日召し捕りを行うことが決まり ました。

み雨戸を締切りにした…。 を見て大塩平八郎は室内に引っ込 捕り棒で打ち合うも、 さを半分に仕立てていた樫の召 顔を出す。 路地口が開いた美吉屋。大塩が 室内の捕方を想定し長 捕方の包囲

て、「大塩平八郎といわれ候もの、緊迫の状況が綴られます。つづい 大塩は「鉄砲、鉄砲」と答え、「鉄 して幕が引かれます。天保8大塩平八郎親子の探索は、 打ち破って突入したところ、 と応答。養子格之助を突き殺した じんしやう(尋常)に出てこい」と 砲之なき事はとく知れて有る」 ひきやう(卑怯)千万、 脇差を投げつけ火薬に着火したと。 うとする気配があったので雨戸を うえ、火薬を取り出し火をかけよ のことばに、「今出る、今出る」 ふ(勝負)せい」との呼びかけに、 「中斎先生ともいわれるもの、 喉へ三度ばかり突き立てた 出てしやう 大塩

古河歴史博物館学芸員 永用俊彦 月2日(西暦5月1日)のことでし

天保8年3

19 - 広報古河 2018.2